

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「エルトゥールル号」って知ってますか？①～

ウクライナ情勢・・・・・・・・・・その動向を世界が注視していますが・・・

1985年3月12日。イラク軍によるイランの首都テヘランへの空爆が始まった。

さらに・・・イラクのフセイン大統領（当時）は3月17日、声明を発した。

「3月19日20時半以降は、イラン上空を飛ぶ全ての飛行機を打ち落とす！」

大変なことになりました。**残された時間は2日、48時間**。しかし、イランにいる日本人には脱出できない状況に追い込まれていたのです。

・LAST 48hrs

イランにいる他の国の人たちは、それぞれの国の軍隊の協力で脱出。しかし当時の日本はイランとの定期便を持っておらず、自衛隊が海外で活動できる法律もなかった。

日本は他国に応援を求めるが、どの国も自国の国民の救出に手いっぱいであった。

・LAST 24hrs

在イラン日本人 200 名以上は脱出方法が見つからずにいました。あと 24 時間。・・・これまでか！
戦場と化したテヘランに日本人は閉じ込められました。

イランの日本大使館の野村豊大使はそれでもあきらめず、トルコ大使館のビルレル大使に助けを求めに行きました。しかしどう考えても、無理です。トルコの自国民もまだテヘランに残っているのです。

万策尽きた・・・。

ところが、トルコ側の答えは「イエス！」でした。自国民を危険にさらすことになるのに、2機の航空機をテヘランへ派遣してくれることになったのです。トルコ航空では、即座にこの危険なフライトをしてくれるパイロットを募りました。

すると・・・その場にいたパイロット全員が志願してくれたのです。

しかし・・・まだ問題が残っていました。日本人がどこに避難しているか分からない。連絡がとれない。そうこうしているうちに残り24時間となった・・・。

その時、一人の日本人が立ち上がった。

「俺がみんなを探してくる！」

空爆の危険の中、彼は街へ走り出した。他の大使館員たちも寝ずに動き、ついに連絡が行き渡った！

そして、2機のトルコ航空に、215人の在留邦人が乗り込みました。

飛行機には、命を懸けて救出に来てくれたトルコのクルーたちが待っていました。

「仕事とはいえ、戦火をくぐって人を助けにいくなんて・・・

相当不安だったと思います。

見知らぬ外国人を助けるのに自分の命をかけられるものなのかと・・・胸が熱くなりました。」

乗り込んだ日本人はそうコメントを残しています。

・LAST 4hrs

しかしまだ油断できません。残り4時間でイラン領から脱出しなければいけない。時間との戦いです。（つづく）

『人生に悩んだら「日本史」に聞こう』ひすいこたろう＋白駒妃登美（祥伝社）より



脱出は成功したのか？

なぜトルコは航空機の派遣をしてくれたのか？

タイトルのエルトゥールル号って？・・・・・・・・あれっ…………どこにも出てきてないやん！

通心（信）初の・・・・・・・・「つづく」です・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・続きは明日！